

お浄土のしおり 善導寺寺報 季刊九号

冬号
平成二十九年
三月五日



阿弥陀三尊来迎図

法然上人のお言葉 (平成新版元祖大師御法語「より」)
後篇 第14 四修(むしゆ) 要義問答

問(せう)。信心(むんじん)のようは、うけたまわりぬ。行(ぎよう)の次第(むだい)、いかが候(せうろ)うべき。

答(こたう)。四修(むしゆ)をこそ本(ほん)とする事(こと)にて候(せうら)え。

一(ひと)つには長時修(むようじしゆ)、乃至(ないし)、四(よ)つには無余修(むよしゆ)也(なり)。

一(ひと)つには長時修(むようじしゆ)というは、善導(ぜんどう)は、命(いのち)の終(おわ)るを期(ぞ)として誓(ちか)つて中止(ちゆうし)せざれという。

二(ふた)つに恭敬修(ぐぎようしゆ)というは、極楽(ごくらく)の佛(ぶつ)・法(ほう)・僧宝(そうぼう)に於(おい)て、常(つね)に憶念(おくねん)して尊重(そんじゆう)をなす也。

三(み)つに無間修(むけんじゆ)というは要決(まうけつ)に云(いわ)く、常(つね)に念佛(ねんぶつ)して往生(おうじよう)の心(こころ)をなせ。一切(ひつさい)の時(とき)に於(おい)て、心(こころ)につねに思(おも)いたくむべし。

四(よ)つに無余修(むよしゆ)というは、要決(まうけつ)に云(いわ)く、もはら極楽(ごくらく)をもとめて弥陀(みだ)を礼念(らいねん)するなり。但(ただ)諸余(ちよよ)の行業(ぎようごう)を雜起(ざつき)せざれ。所作(しよさ)の業(ごう)は日別(たちべつ)に念佛(ねんぶつ)すべし。

「心(こころ)からまごころをもつて、自身(みづかみ)の罪業(つみごころ)の有無(あやふさ)を思(おも)わず、極楽(ごくらく)に生まれようと願(ねが)つて」と、なむあみだぶつと阿弥陀様(あみださま)の御名前(ごなま)を称(な)えるのが、極楽往生(ごくらくおうじよう)が決定(けつじよう)されるお念仏(ねんぶつ)の心(こころ)です。



- この、
- 1、心(こころ)からまごころをもつて、
 - 2、自身(みづかみ)の罪業(つみごころ)の有無(あやふさ)を思(おも)わず、
 - 3、極楽(ごくらく)に生まれようと願(ねが)つて

お念仏(ねんぶつ)を称(な)える、この三(さん)つの心(こころ)の要素(ようそ)をひとまとめにして表(あらわ)すと、

「ただし三心四修(さんしんしよ)と申(まを)すことのせうろは、皆(みな)、決定(けつじよう)して、「南無阿弥陀佛(なんむあみだぶつ)」にて往生(おうじよう)するぞ、と思(おも)う内に籠(かご)もり候(まを)なり。(法然上人(ほつぜんじやうじん)・「一枚起請文(まいまいきじようぶん)」)」
「ただし、三(さん)つの心(こころ)とか四(よ)つのお念仏(ねんぶつ)を称(な)える時(とき)のやり方(かた)というは、

ひとことでは、すべて、南無阿弥陀佛(なんむあみだぶつ)と声(こゑ)を出(だ)して称(な)える事(こと)によつてこれで決定(けつじよう)して必ず極楽世界(ごくらくせかい)に生まれるぞ、と思(おも)う気持ち(きもち)にまとまる事(こと)になります」

という事(こと)です。

お念仏(ねんぶつ)をしているときに、南無阿弥陀佛(なんむあみだぶつ)にて、「必ず生まれるぞ」と思(おも)い取るわたしたちの気持ち(きもち)に、往生(おうじよう)できるかどうかがかかっているのです。

阿弥陀様(あみださま)のご意志(ごいし)は、「我が名(な)を呼(よ)ぶものは必ず救(すく)い取るぞ」と決定(けつじよう)しているから、あとは、わたしたちお念仏(ねんぶつ)を称(な)える方の気持ち(きもち)次第(じだいに)なるのです。

「どうかな、どうかな」と迷(まよ)っている限り(かぎり)は、往生(おうじよう)は定(ま)まりません。「阿弥陀様(あみださま)のお誓(ちか)いがあるから」必ず往生(おうじよう)するのだ、と、思(おも)い切る」事が大事(だいじ)です。だから気持ち(きもち)がゆるがず、うれしくなつて、よくお念仏(ねんぶつ)を続(つ)ける事が出来(で)るのです。

この気持ちには強弱があると思います。だから、より明らかに、強くこう思えるように**気持ちをこしらえながら、お念仏をすることが肝要**です。

お念仏をするときは、このことだけ心がけましょう。

私も、このように心がけを忘れないようにして、お念仏をしていこうと思っています。

ご法事を承っている時に、いつも、ご一緒に若干のお念仏致しましょう」と皆様におすすめしますが、自信がなくてよわよわしく聞こえる時がありますが、声を特別大きく称えるひつようはありません、遠慮のないこのようなお心がけが善いのです。

さて、「四修」というのは、どんな事が、巻頭のお言葉であらわされています。

「四修」というのは、お念仏をするときの四つの申し方」という意味と受け取って良いと思います。「三心」は、お念仏するときの心の有様の三つの要素」で、「四修」は、お念仏をするときの四つの申し方」です。それは何かといいますと、

1、長時修（むようじしゆ）→思い立った時から命終わるまでお念仏を続ける。（途中で投げ出さない）

2、恭敬修（ぐぎようしゆ）→極楽世界のあみだ仏様、その阿弥陀様が、お悟りになっているすべての道理道理、彼の世界で修行されている菩薩の方々、に対して、常に慕い思つて尊重し敬つてお念仏を申す。

3、無間修（むけんじゆ）→常にお念仏してこれで必ず往生することだなあ、という気持ちをこしらえている事。いつでもどこでも、嬉しいお念仏をしていること。→最初は毎日何遍か習慣をつけることになりませんが、そのうちどこでもいつでも支障ない事情の時は、お念仏が嬉しく絶えないこと。これは、だんだんとそうなる事と受け取って善いのだと思います。私だって同じです。

4、無余修（むよしゆ）→往生極楽のために（極楽往生を目的とする）は、毎日お念仏して（最初は数遍でも）お念仏以外の勤めをしない。例えば極楽往生のために、神社にお参りしたり、神様に祈る事が、極楽往生のための行為だと解釈しないことです。神社にお参りして神様に礼を取るの、何々が成し遂げられますように決心しました。お守り下さい」ということで、この成し遂げようと思う「何々」は、この世での事のはずで、「極楽往生」ではありません。神様に祈る目的は、必ず別のはずです。神様は、「この世界におわす尊い方」です。極楽世

界におわす方ではありません。極楽世界に生まれる事をたのむのは、その世界のご主人である「阿弥陀様」だけです。だから、「往生極楽」のためには「南無阿弥陀仏」と申すばかりで、他の事をして「往生極楽」は叶いません。

「極楽に往生する」のは、人生の帰着点の事です。神様にいのるのは、「人生の途中の色々な事」のはずです。同列に考え、同列に行うと、心は混乱して、どちらも成就しがたくなります。このように気持ちを整理して受け取るべきです。

ですから、法然上人にも次のような言葉があります。

「この世の祈りに、余仏、余神に祈ることは苦しからず」と。

わたしたちは人生において、色々と用を足さなければなりません。仕事の上では、種々の事をして、ごはんも頂き、ご不浄にも行かなければ生きていけません。時には家族旅行をしたり、知人と外食をしたり、若者だったらデートをしたりして、楽しむ事も必要です。その様な行為と同列なのが、「この世の祈り」です。「合格の目標をたてました」「家内安全の目標をたてました」「病気を治そうという目標をたてました」

「ついでに、成し遂げられるように努力しますので、お守り下さい」と神様や（阿弥陀様以外の）仏様に祈るといふ行為が含まれます。

人生の帰着点を極楽に定めると、お念仏以外の行為は、みな「南無阿弥陀仏」のお念仏を申す事がより進むような「助け」となる事になるのです。言い換えれば、お念仏を申す助けとなり、喜びすすんで申す



す元気が出る事ならば、その行為は皆お念仏の助けとなる行為（「助業」といいます）になるのです。阿弥陀様だけはわたしたちにとつて特別な仏様なのです。

不思議なことに、よく考えると、お念仏は「人生の帰着点」を極楽に定め実現する行為なので、お念仏の道（往生極楽の道）を往くならば、人生の歩みの中での務めの行為は、皆「人生の帰着点を定めるお念仏を、より励むための助けになる行為」となり、次元が違ふという事になります。

代々の天皇陛下も極楽往生のご信仰をお持ちの方々が多くいらつしやつた、というお話しても、よく合点がいくのではないのでしょうか。

日本の習慣・日本人の心(新シリーズ)

一、天皇陛下のお仕事

近頃、よくテレビなどでも、「日本の心や伝承技術の再発見」が出来るような番組がよく組まれています。「こんなに繊細で思いやりのこもったすごい文化があったんだ」などと、私達も感嘆する時があります。ここでは、日本人である私達が、知っておいた方がよく、その方がより自信が付き、明るい方向に心が向くような「日本の良い慣習、思想、制度習慣、歴史上で起こった事」等を、ご紹介してみようと思つています。筆者が知らなかつたことも多々あると思いますが、その時は逆に教えて頂ければ、「ああ日本人で良かった」という気持ちを共有も出来るでしょう。

先ずは「天皇陛下」の事です。天皇陛下の御事は、皆さん、どのくらい御存知でしょうか。

私も、何もかも知識があるわけではありませんし、人から伝えられた知識ですが、先ずはじめに誰もが絶対に知っておいた方が良くと思う事があります。

お子さん方がいらつしやつたら、是非とも何かの機会に伝えてあげて下さい。

当寺は、明治2年、明治天皇から「勅願所」の綸旨を賜つたという歴史があります。このご縁で、私が調べたり、識者から伝え聞いた事です。

◎皆さんは、天皇陛下のお仕事は何であるかをご存知ですか。

天皇陛下のお仕事は、毎日毎日、「日本の民一人一人の幸せを神々に祈ること」です。宮中には、日本の神々や代々の皇統の方々をお祀りする社殿があります。そこで、神様に毎日お祈りをなさつていらつしやるのです。

日本国民一人も漏らさず、私達一人一人の幸福・安寧を祈る事が、陛下のお務めです。

よく、「御公務」という言葉を聞きますが、これは、現行憲法の規定を中心とした、外国公使との御面会、国会を召集する事、法律を公布する事、等の国事行為がありますが、これらの事の他に、**天皇陛下の本当のお仕事がある、と思つてほば差し支えない様です。**

つまり、陛下は、「国民一人一人の幸せを祈る」という初代天皇から

のご行為を務め、仕事としておられて、「御公務」は、その中心となる**お仕事**の他のものです。

年間三分の二以上が「本来のお祈りのお仕事」以外の「国事行為」で、朝から宮中社殿での祭祀がお出来になれない日は、代理使者に祭祀を命じながら、他所でお祈りを為されているとご想像申し上げることが出来ます。

この、「私共一人一人の幸せを祈る、この祈りのお気持ちは、本物だと思わざるを得ない事」です。

最近自然災害が多いですが、両陛下が被災地をご訪問なされた時の映像を時々テレビ等でご覧だと思います。その慰問のお姿からも伺えますが、伝え聞きますと、ひざまづかれた陛下と直接、言葉を交わす事の出来た被災者の方は、必ず、なんとも言えない有り難さを感じるのだそうで、**家も家族も失くしてこれから先、生きていても甲斐がない」とどんなに悲嘆に暮れていた人でも、陛下とお言葉を交わす事が出来た人は、もう一度生きてみようか」と必ず思いかえすそうです。**何故、そうなるのかといいますと、その御祈りのお心が本物だからです。

東日本大震災の時、電気暖房を使えない被災者の事を思い遣り、御所の電気も暖房もお止めになって、被災地の回復まで、そのままお過ごしになったのは日本広しといえども両陛下だけだと思いますし、ご慰問の旅が日本人で一番長かつたのも両陛下です。(私も震災のあとで知りました)

さかのぼれば、昭和天皇は、戦後、東京オリンピックの3年程前まで、皇居の地下防空壕にお住まいになっておられました。空襲で家を失つた人々の事を思い遣りになり、国民すべてが家屋に住める条件になるまでは、私は御所に住まない」とのご意志でした。(戦中戦後、皇居の御所は、空襲で住めなくなつていたので。)

大正天皇は、関東大震災の時、いち早く都民の為に宮内省大膳課に炊き出しをご指示なさりました。

明治天皇が、日露戦争の時の兵士を思い遣り、毎日「日の丸弁当」のように、白米と梅干し一つのお食事にとどめ、戦死者の名簿を素速く報告する様にお命じになり、時には夜を徹してお祈りをなされていたのは知る人ぞ知る有名な御事です。勿論、暖房無し、夏は扇も無し、です。執務室は8畳程の1間にお机とご寝具を昼夜取り替えて半年以上お過しになつたそうです。(広島でのことです)

誤解のないように言いますが、明治天皇は最後の最後まで、ロシアとの戦いを避けようとした方です。

戦いを避けることが叶わなくなった時、

四方の海 みな同朋 はらから) と思う世に
など波風の立ちさわぐらん」

(四方の海を隔てた全ての国の人々は、皆な同胞だと思ふのに、なぜ、波風がたちさわぐように静かな平和が乱されるのであろうか〜という様な意味でしょうか)

と、おなげきになった御製(天皇陛下の歌)が有名です。

(日露戦争だけは、派兵して抵抗しなければ、朝鮮半島も日本も、ロシアの植民地にされ、女子供は惨い扱いを受け、大人の男はよくて奴隷扱いにされる、という状況でした。ロシア皇帝は「日本を取る」と公言していたのです。植民地というのは、とても酷い扱いをされたのです。インドや東南アジアのほとんどの国がそうでした。因みに朝鮮半島を日本が植民地にした、というのは、事実ではありません。植民地」にしたのではなく、「併合」をしたのです。「併合」というのは、王朝はそのままにして日本と同じ国にする事で、鉄道、病院、学校など沢山の援助をして、その国の文化水準を上げる事です。〜しかも、それは日本が朝鮮に頼まれて行った事です)

アメリカで言うと、ハワイがアメリカに併合された国です。その後アメリカの「州」の一つにされて、王朝は無くなつてしまいましたが、江戸時代の光格天皇は、飢饉の時、幕府の備蓄米を世間に放出させた方でした。

仁徳天皇の、「民のかまどは 賑わいにけり」の逸話は有名です。

この他、沢山の民を思ふお気持ちを察する出来事は、沢山あります。(これらの事はのちのちくわしく書きたいと思います。)

以上の事は皆、代々の天皇が如何に国民の幸福を毎日祈つておられたかがよく分かる事象です。いざとなった時に、そのお心が表われるのだと思います。

「大御宝」(おおみだから)という言葉があります。

ご皇室では、初代天皇から、国民の事をこの様と呼んでいらつしやるのです。

日本の民一人一人は「大御宝」(おおみだから〜おおいなる、おんたから)です。と。

如何でしょうか? 知らなかつた方は、少し、「えっ」と思つたのではな



(写真・皇室のお寺・京都、泉涌寺 御座所庭園)

いでしょうか?

紙面の都合で、今回はここで止めますが、驚愕といつても言いすぎでない程の事実を、この欄では述べていきたいと思つています。

~~~~~ 本堂ご本尊修復事業の勸募 について

前号にてご通知申し上げました通り、総代の方々からも、このたびの修復により大きなご縁を結ばせて頂くためにも、応分のご喜捨を致したいとのお声がございます。善業を薦めさせて頂く為に、檀信徒の皆様にも、応分のご喜捨をお勧めする次第となりましたが、ご喜捨の要項については、今暫く熟考させて頂きま⁴して、勸募要項のお知らせは、次号の予定となりました。

かなり経済環境が良くなつてきたともいわれていますが、いまだ限定的に思われます。世帯単位の所得格差は広がつていますので、どのような勸募が平等にお心に良い結果を招くか、「という事に留意して、出来るだけ廣くご意見を聞きたいと思つています。近い時期にお知らせします。勸募要項はもうしばらくお待ち下さい。

終南山 善導寺 七十八世

念譽侯雄 拝